浄泉寺通信
第21号

死別の悲しみ

新年度が始まりました。お花見に行かれた方も多いでしょう。卒業式や入学式、入社式、退職など出会いと別れが交錯する春ですので、今回は釈尊の入滅を悲しんだ阿難と羅睺羅という二人のお弟子を通して、死別の悲しみについて考えます。

釈尊には阿難という侍者がいました。わたしたちが読むお経に「仏告阿難（仏が阿難に以下のように告げた）」と書かれていることから分かるように、「釈尊の教えをお弟子のなかで最も多く聞いた方」と言われています。阿難が釈尊にお仕えするようになったのは、釈尊が55歳の頃。釈尊は身の回りの世話をしてくれる侍者が欲しいとおっしゃり、お弟子たちが人選をすすめたものの希望者が多くて決まらず、そこで釈尊は阿難を望まれました。その当時、阿難は35歳前後と考えられ、50代、40代が多いお弟子のなかで若く体力がある。加えて釈尊の従弟であり、旧知の間柄でした。爾来25年、侍者として釈尊がどこへ行かれるにもご一緒し、釈尊がおっしゃったお言葉をひとつ残さず記憶しつづけましたが、とうとう別れの時がやってきます。入滅を前に、釈尊は頭を北、足を南に向け、右わきを下にして横になっておられ、その前で阿難は大粒の涙を流していました。「わたしはまだこれから学ばねばならないのに、師はお亡くなりになろうとしている」。その言葉を聞いて釈尊はおっしゃいました。「やめなさい、阿難。泣くな、悲しむな。わたしはいつも説いたではないか。生じたもの、存在したもの、つくられたものはいずれ壊れる。すべての愛するもの、好むものからも別れ、離れるのも同じ道理なのだから。悟りを開く人は過去にもいたし、未来にもいるだろう。悟りを開く人のそばには、必ず侍者があった。阿難は実によくやってくれた。わたしにとって最上の侍者だった。これからも怠ることなく修行を完成なさい」。この言葉を最後に、釈尊は息を引き取りました。80年のご生涯でした。その瞬間、阿難は両腕を突き出して泣き、砕かれた岩のように打ち倒れ、のたうち廻ってころがったそうです。阿難は他の誰よりも多く釈尊のお言葉を聞くことができましたが、教えを聞き過ぎたためにかえって理解に苦しみ、また自らの修行にじっくり時間を割けず、他のお弟子がことごとく悟りを開いていくなかで、いまだ悟りを開いていませんでした。ゆえに大地をのたうち廻って悲しんでいたのですが、その姿とは対照的に愛執を離れた修行僧数人は、ぐっと涙を堪えていました。

そのなかに羅睺羅の姿がありました。釈尊は王子として生まれ、長じて妃をとり一子をもうけた直後に出家しましたが、その子が羅睺羅です。羅睺羅も9歳で出家し、釈尊のもとで修行を続け、このとき50歳。師が父であることから教団内に嫉妬する空気があり、ゆえに人一倍努力を続け、険しい山野で独り瞑想を重ねてついに悟りを開き、阿羅漢となりました。釈尊も羅睺羅を特別扱いすることなく、だからかお経のなかに羅睺羅が出てくることはほとんどありません。愛執を離れた羅睺羅は、釈尊入滅の場面でも表情を変えません。その姿は完成された修行僧で、阿難と対照的ですが、実父が目の前で息を引き取るという点を考えると、かえって不自然でもあります。

一方で平安時代の『今昔物語』に、羅睺羅が釈尊のたった一人の息子としての側面が、自然に描かれています。羅睺羅は釈尊入滅の悲しみから耐えかねて、その場から逃げ、神通力を使って仏の世界へ飛びました。しかしそこにいた仏たちに諭され、元の世界へ戻ることになります。そして羅睺羅が戻ってくることを、死の床にある釈尊は待っていました。羅睺羅の手を握り、「羅睺羅よ、おまえはわたしの子だ。十方の仏たちよ、どうか羅睺羅を護りたまえ」。これが釈尊の臨終の言葉だったと、『今昔物語』にあります。お経に描かれる釈尊は、「すべてのことは無常であり、そこからただ解き逃れることを求めなさい」と羅睺羅に語ったとあり、それに対して羅睺羅は教えを淡々と受け止めたとありますが、『今昔物語』で描かれているのは修行者であり師としての釈尊ではなく、子を想うひとりの親としての姿です。

父に捨てられた羅睺羅は、寂しさと憎しみのなかで少年期を過ごしたことでしょう。9歳から父と過ごしたとはいえ、集団生活ゆえ多感な頃であっても父としての慈愛あふれる言葉はかけてもらえなかったはずです。羅睺羅は晩年になってようやく自らを幸運だったと認めることができたものの、修行者の集団とはいえ愛憎のなかで、釈尊の子という重圧と闘った青年期、壮年期だったことでしょう。しかし父子は臨終というクライマックスにようやく互いを認め合ったというのが『今昔物語』の物語です。愛憎というドラマが根底に流れているからこそ、諸行無常の言葉が響く。死別の悲しみには涙が合うと考える感性は、国境と時代を超えて変わらないはずです。（住職）

1月17日に「新年のつどい」を開催しました。大きな白でお餅をついて食べ、そのあと腹話術を見ました。もち米は富山浄泉寺にお供えされた10kgと、埼玉県小川町で有機農業を営む友人から買い求めた10kg。つきたてのお餅をきなこや大根おろしなどをまぶしてさっそくいただき、お土産用の丸餅づくりも子どもたちが手伝いました。続いて坊守の「育ての親」で、プロ腹話術師として活躍の城谷さんが大笑いさせてくださいました。長崎市に生まれ育った城谷さんは平和を願い、「子どもたちの笑顔がいつまでも続くように」と結んでくださいました。

城谷護さん

盂蘭盆会のご案内

ご先祖を偲び、西方浄土へ想いをはせる盂蘭盆会を、東京築地の築地本願寺でおつとめいたします。

富山浄泉寺住職、埼玉浄泉寺住職ともに参ります。法要後には築地本願寺「日本料理紫水」オリジナルの精進弁当をいただきます。とくに初盆（新盆）に当たられる方は是非お参りください。

■7月17日（日）午前11時

■築地本願寺（東京メトロ築地駅下車徒歩1分、無料駐車場あり）

■参加費3，000円（お一人様、法要懇志とお弁当代として）

■法話　福井学誠（埼玉浄泉寺住職）

■後日往復葉書を郵送いたしますので、返信でお申し込みください。

【4月、5月、6月、7月の活動】

4月15日(金)19時（毎月開催）
　親鸞聖人御消息講座(第28回)（フレサよしみ）
4月16日(土)9時（偶数月開催）
　写経会　（浄泉寺本堂）
5月20日(金)19時
　親鸞聖人御消息講座(第29回)（フレサよしみ）
5月29日(日)10時半（奇数月開催）
　浄泉寺コーラス練習　（浄泉寺本堂）
6月17日(金)19時
　親鸞聖人御消息講座(第30回)（フレサよしみ）
6月18日(土)9時
　写経会　（浄泉寺本堂）
7月17日(日)11時
　盂蘭盆会（お盆の法要）（築地本願寺）
毎月第一土曜日　9時　あいる書道会（浄泉寺本堂）

◆葬儀費用が高いという苦情や相談が、国民生活センターに寄せられています。過日、浄泉寺本堂で勤められた葬儀の経費は約20万円でした（右写真）。お花を一対お供えした簡素なものながら、現代的な式場にはない寂とした雰囲気で、またその点を心得た近所の良心的な葬儀社さんでした。浄泉寺のお近くにお住まいの方は、是非お寺を式場にしてください。浄泉寺にご縁のある方から式場費はいただきません。「その分、お布施が高いのでは？」。いえいえ、浄泉寺はこれまでも、これからもお布施の額を

申し上げることはいたしません。「葬儀ならいくら」と謳う寺院と業者が多いなか、「それ以下の額しかない方は、葬儀すら出せないのか」と思う住職ゆえ、お布施の定額化にはこれからも反対です。それぞれのご家庭でお布施の金額はお決めください。ところで、葬儀費用の内訳は大半が人件費と手数料といわれますので、お花を自分で活けるなど出来ることを自分でしていけば、葬儀費用は安くできます。（住職）